

1984年対馬暖流域における異常漁況* (抄録)

安達 二郎

日本海では1984年2～3月頃から沿岸より沖合にかけての広い海域で20年以上に1回の確立で起る異常低水温となった(長沼, 1984; 岡, 1984)。この異常低水温に関係したと思われる魚貝類の斃死および漁況の特異現象については、笠原(1984)が詳しく報告している。ここでは、その報告の概要を紹介するとともに、日本海での重要漁業であるまき網および沖合いか釣漁業の対象種であるマイワシ、スルメイカの年級構成、系群構造に現われた変化について報告する。

要 約

- 1) 1984年3月以降、本州中・北部沿岸域を中心に、サザエ、アワビ、ムラサキウニなどの貝類、イシダイ、アカムツ、ウマヅラハギなどの定着性魚類、マアジ、ブリ、ヒラマサなどの回遊性の魚類の斃死、仮死がみられた。
- 2) 不漁の魚種は本州沿岸域におけるヤリイカであった。好漁の魚種はマイワシで史上最高の漁獲がみられた。
- 3) 1984年3～5月にかけて小羽マイワシが出現した。この小羽イワシは、従来ならば日本海北部沿岸域で越冬していた群が、低水温のため西部沿岸域で越冬したものと考えられた。
- 4) 1984年5～6月の浜田港でのマイワシの年令組成は1才魚(1983年級)の占める割合が、極めて大きいことが特徴であった。
- 5) 1984年4～6月に漁獲されたスルメイカの魚体は例年よりも小さいことに特徴があった。この魚体の小型化は低水温の影響としての体成長の遅れよりも、むしろ夏生まれ群の占める割合が秋生まれ群よりも大きかったと考えられた。

* 水産海洋研究会報 第50号 No.2 (1986) に発表した。